

第83回麻布獣医学会 一般演題3

悪性末梢神経鞘腫と診断されたM.ダックスフンドの1例

森下 佳¹, 森 淳和^{2,4}, 岩尾 琢³, 三品 美夏⁴, 渡邊 俊文⁴¹DVMs 動物二次診療センター, ²日本動物遺伝病ネットワーク,³センターきた動物病院, ⁴麻布大学附属動物病院

[はじめに]

犬の末梢神経系の腫瘍は稀であるとされ、その多くは高齢の大型犬である。

今回我々は二次診療センターにおいて中年齢のミニチュア・ダックスフンド(M.ダックス)の悪性末梢神経鞘腫と診断した症例を経験したので報告する。

[症例と結果]

症例は5歳避妊メスのM.ダックスで、半年前から存在する進行性の左前肢挙上性跛行の精査を目的に、当センター整形外科に紹介された。

当センター受診前には Loose shoulder (肩関節不安定症) と診断され治療経過中であったが、内科的治療(運動制限, NSIADs)に反応なく進行性の経過をとっていた。

初診時左前肢の挙上とナックリング, 左腋窩部に2×2×3 cm 大の皮下腫瘍が触知され, 神経疾患あるいは腫瘍の増大による神経圧迫からの神経根症状と考えられたため, 同部位のFNA, 超音波検査, 全身麻酔下で Tru-cut biopsy ならびに CT 検査による精査を行った。FNA では, 間葉系細胞が確認されたが, Tru-cut biopsy の結果は, 炎症性変化であったため, 2

週間のステロイドによる消炎治療を行ったが症状の改善や腫瘍の縮小化は認められなかったため, 腫瘍の切除生検を行った。

手術時所見では, 肉眼的に同部位の末梢神経との連続性が認められたため, 肉眼的に正常と思われる神経を含み, かつ中枢方向に可能な限り最大に拡大切除を行った。

病理組織検査結果では悪性末梢神経鞘腫と診断され, 中枢側の神経断端にも腫瘍性変化が認められた。

[経過と考察]

手術後74病日での所見では, 局所腫瘍の再発や拡大は見られず, 症状は神経学的な改善こそみられないものの, 疼痛はなく急激に悪化することなく良好に経過している。末梢神経腫瘍の平均診断期間は6ヶ月といわれ, この症例においても確定診断までに約半年の時間を要している。神経根症状を呈する小型犬で腫瘍の確認ができない場合であっても神経鞘腫は鑑別疾患の一つとして十分考慮すべきであり, また飼い主への説明においても重要であると思われる。